

余市町でおこったこんな話

余市町でおこったこんな話その144

余市町の埋もれた歴史等を紹介し、改めて余市町を再認識するコーナーです。

戦争

太平洋戦争が終わって71年目の夏を迎えます。

昭和12（1937）年、日中戦争が始まると、町民から飛行場建設や工場での労働などに動員される人がでてきたり、生活物資の購入が切符制になって、砂糖、マツチ、米、木炭、石炭が配給でなければ手に入られなくなりまりました。同16年に太平洋戦争へと戦局が拡大すると、お酒、お菓子、味噌、醤油、衣料品、灯油、粉ミルクなど配給の対象が更に広がりまりました。食糧の増産をはかるため、りんごなどの果樹が切り倒されて、馬鈴薯、ニンジン、ゴボウ、カボチャ、トウキビが植えられました。トウキビの芯は飛行機の潤滑油の原料として、食べた後の芯まで乾燥させて出荷されました。

町内には陸軍船舶部隊が駐留し（こんな話その41）、陸軍弾薬庫も建設されました。同18年末に完成した施設は登町大登地区にあって、弾薬庫と燃料庫を中心として兵舎、下士官官舎、将校官舎、事務室が並んでいました。終戦を迎える同20年6月20日、この施設が大爆発を起しました。目撃者の証言が『登町郷土誌』に見えます。

「午前6時前、軍の弾薬庫の方向に小さな爆音が聞こえ、黒煙が2、3度上がった。我々は軍（の施設）で火災が発生したと思いが、手伝いに走った。宮門の50m近くで兵士達が、危険だから、近寄らないでくれと、叫

びながら、避難して来た。間もなく、大音響と共に大爆発が起った。この爆発は第一弾薬庫であった。この時、学徒動員で勤労奉仕中の、余市中学校生徒（1名）が死亡した。」この大惨事の原因はタバコの不始末とも言われ、集落内の建物の窓ガラスが割れたり、障子戸が壊れる被害がありました。被害は山林にも及び、飛び散った弾薬によって山火事が何度も発生したそうです（前掲同書）。

昭和の初めころ、町内で徴兵のための身体検査が行われていたのは、大川尋常高等小学校（現在の太田小学校）でした。同校には「徴兵署」が臨時的に設けられ、検査をうけた適齢者は余市町に本籍がある者で200名前後、寄留者（余市町に本籍がなく居住している者）も検査を受けました。兵役に応募する義務がある者は、その中から毎年100〜150名が決められ、合格者の中から更に選抜されて現役兵とし徴集されたのは毎年30名ほどでした（昭和2年から同6年までの平均値『余市町郷土誌』）。

同6年の満州事変以降、合格者の枠がそれまでよりも拡大、増員がはかられました。太平洋戦争末期には地区の「ほとんどの成年男子が国民兵として戦争に動員」されたこととなりました（『登町郷土誌』）。

余市町から中国や沖縄、太平洋方面へ多くの人が兵士となつて行きました。山道村（現在の豊丘町）から出征した25歳の男性からお兄さ



写真：役場での合同慰霊（『登町郷土史』）

夏山の遭難防止 ～山登り体力・技量を考えて～

山の雪解けとともに、登山やハイキングなどで山に出かける機会が多くなります。山岳遭難を未然に防ぐため、次の点に注意しましょう。

- 登山は十分な装備とゆとりある計画を立て、自分の体力や技量にあった登山を心がけましょう。
- 登山計画書を作成し、家族や職場のほか最寄りの警察署や交番・駐在所にも提出しましょう。
- 経験のあるリーダーのもと、複数人での登山に努め、単独での登山は控えましょう。
- ヒグマとの遭遇を避けるため、音の出るものを携行しましょう。
- 万が一のために、携帯電話などの通信手段を携行しましょう。
- 迷ったら必ず110番をしましょう。すると警察官がだいたいの現在位置を把握できます。

◆問合せ 余市警察署 ☎21-0110



んへあてたお手紙の一節です。「前略、私もともすると雅之君（息子さん）の写真を取る事が出来なくなるんではないかと考へております。祖母様、御両親には絶対後便致します迄申し上げないようお願い致します（後略）」（『郷土史』）。

モイレ山中腹の明治神社には、郷里への生還が叶わなかった、日露戦争以降、676柱の英霊が祭られています。